第一一〇戦記

Dr.スポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第一一〇戦記

【Ｎコード】
Ｎ４１６３Ｙ

【作者名】
Ｄｒ．スポ

【あらすじ】
くだらない戦争に、最高の幸せをそえる

？　全ての始まり、プロローグの場合（前書き）

歩み始める
欠けていると知りながら
足りないものを補うために

？　全ての始まり、プロローグの場合

世界を二度の大火が焼き、長い時間が経過した。
今や当時を実際に知る者はおらず。しかし、知らぬが故に繰り返さぬよう記録が残る現世。
人が種族ではなく。世界共通パス――通称：顔パスというＩＤを身体に埋め込むことによって、個人を特定するようになった時代。
最早、技術の進歩によって戦争が資源の無駄使い！！　と評される今。それでも、軍隊という概念が消えることはない。
あまりに滑稽。体裁と見栄の衝突から生れる利権に群がるバカは、そうそう消えないのだ。
クリーンで恒久的な平和を望み、されど矛盾を抱えた軍隊（どうけ）を用意する。
望まれぬ彼らの、戦闘と信念と友情の話をこれから語って聞かせよう。

「と言うコンセプトの劇を、幼稚園でするように上層部から指令がきたのだがね。彼らは、我が部隊を昔の『ケーサツ・コツーカ』と勘違いしているようだよ？」

やれやれ。と九名の前で、一人の男が首を振って見せた。その手には、二人の兵士が熱く包容をかましている絵の描かれたフリップが掲げられている。
彼は、世界共通軍隊・ノースウィンド（略称ＮＷ）所属の第一一〇小隊隊長だ。
北国で吹く極寒の風の如く、敵へと厳しい攻撃を仕掛ける。と言う意味と同時に、経済へも極寒を運んでくるだろうと皮肉ありありな二つ目の意味も持つ軍に属するこの小隊は、総員が一〇名。

小隊長を除く、残りの九名が全員女性というかなり奇抜な編成となっている。
諸処の事情から頭へ包帯を巻いている隊長が、持っていたフリップを適当な所へ放り投げた。

「まあ、こんなものはしたくなければしなくても問題ないよ。最悪、子供達と楽しく遊べばいいね」

そんな事よりだ、と前置きした隊長はわざとらしい咳払いで視線を集める。
レクリエーションルームに集合させられた総員は、各々が好きなように立ち位置を決めて話を聞いていた。
座っている者もいれば、立ったままの者もいる。床に座り込み、椅子を引っ張り出し、壁を背にもたれ掛かり、手持ち無沙汰に突っ立ち、姿勢を正して、背中を曲げて、寝そべって。
様々な反応がある中で、しかし彼女らの視線の先には一人がいた。
疑問の意思表示を見せる彼女たちに、その『一人』は満面の笑顔を返しつつ。

「今日から皆と一緒に行動する仲間が増える。所謂、転校生だね？
と言うことで、本人を紹介する前に聞いておきたいのだが。誰か、今朝方にパンをくわえたまま走って曲がり角で人と衝突した者はいるかね？」

どうかね？　と割に真剣な表情で、瞳に期待の色を見せる隊長に失笑の応えがきた。
いつもの変な事言う隊長だぁ。と幼い体格の少女が笑み。軽い病気ですね。と長い黒髪を揺らす女性が静かに笑う。以下、七名がそれぞれに笑う反応を見せたことに満足した隊長は頷き一つ。
入りたまえ。とレクリエーションルームのドアへ向かって声を掛

ければ、そこから影が生まれた。
小柄な女性のものだ。
腰までであるブロンドの長髪は、彼女が軍靴でリズムを刻む度に宙を舞い。険しく顰められた目の奥に、暗い色の碧眼が光を宿している。肩に羽織っている短い指揮者マントには、彼女が『少佐』である事を証明する階級証。
この小隊内では、隊長の次に高官だな。と隊員たちがそれぞれに思う中、不意にその動きは来た。
動きの正体は、綺麗な後ろ回し蹴り。つまり、マーシャルアーツ（軍隊格闘術）に長けた者の動きだった。
なっ？！　と周りが状況を理解する頃には、その足が隊長の頭へ目掛けて殺到する。九名は、その内の一名を除いて誰も反応することが出来ない。
距離的に遠すぎる者が焦り、戦闘に向かない者が呆然として、不意を突かれた者が身を竦ませている。
その中で、壁に寄りかかっていた長身の女性だけが動いた。栗色の長い髪が尾となり、高速で身を飛ばす軌跡を作り上げる。
距離は五メートル。三歩でそれを無に変えて、編み上げブーツで固めた足が振り上げられた。
少佐の足を迎撃する軌道。後出しである不利を埋めるほど高速な機動。
快音が響く。
迎撃は成功した。蹴りの軌道をズラしてあらぬ場所へ着弾させ、一歩の後退すらしなかった隊長を庇う位置に女は割り込む。
暗い色の碧眼を睨み返すのは、艶やかな紅（あか）だ。鮮やかな朱（あか）ではなく、深く濃い色の紅に染まる双眸が高官の少女をロックする。
仮にも上官だが、そんな事はどうでもいい。殺意の段階を三段飛ばしで跳ね上げ、濃密な気配を彼女は自らの内側へ満たしていく。
後は爆発させれば完璧だ。その身は自身の意識とは別の所で、目の前の少女を反射的に殺すだろう。紆余曲折あって隊長に付いて行

くと決めた以上、彼の安全は何が何でも守ってみせる。それが彼女の守るべき矜持の一つだからだ。
上官殺しには銃殺刑が待っているだろうか。そんな刑に対する恐怖心が一瞬だけ頭をもたげ、しかし「だからどうしたっ！！」と内に響く声が全てを凪払う。
決意を胸に必殺の一本踏み込もうとした女は、動こうとしたのと同時に背後から別の動きが来るのを理解する。
当然、背後に隊長以外がいるはずもなく。果たして、彼の手は後ろから紅い目の女を抱く様にして行動を制限してきた。
くっと喉を鳴らすような笑みを響かせる隊長は、彼女を離さず少佐を見て。

「どうかね？　少佐」
「ああ、面白いな。聞いていた通りだ」

ふふん、と鼻を鳴らす少佐が満足げに笑みの形を作って頷く。
応えるように頷き返す隊長は、そこでようやっと居心地悪そうにもぞもぞしていた女を解放した。代わりに、身構えて静観している全員へと視線を送った。
右腕が勢いよく真横へ振られるのに呼応して、服の袖が小気味良い音を鳴らす。それは、隊長が何らかの宣言をするときの前動作だと彼女らは知っていた。
故に言葉を聞き逃さぬよう、耳に神経を集中させて聞く姿勢へと全力を注ぎ。同じく、彼女らが聞く姿勢になっていると理解した隊長は頷きの後に言葉を作った。

「第一一〇小隊隊長、七海八雲の名の下に宣言しよう。現時刻を持って、これまで空席であった我が隊の副隊長へ少佐が着任する事となった。異論は認められない。これは、大佐という私の権限を最大限に利用した決定事項であるっ！！」

なっ？！　と異口同音の音が八つ、レクリエーションルームの中で紡がれる。
横暴な言葉だね、と困ったように笑む。隊員たちの驚きに答える八雲は、しかし言葉と裏腹に撤回の言葉を口にしない。
決定を曲げる気はないと、そう言うことなのだろう。

「ナツキ衛生兵」

だから八雲は、他の意志が付いてきていない事を知りつつも話を先へと進めていく。
隊員の中で唯一驚かなかった衛生兵へと、八雲は視線を送った。はいと応えて一歩前へ出るのは、三つ編み眼鏡の女性である。
大きめの丸眼鏡を押し上げ、うむと頷く八雲に苦笑を返し。

「損な役回りですね、隊長」
「何、構わないよ。それもまた、私の役回りだしね？　それよりも、だ。君は少佐と同期だったらしいじゃないか」

ええと微笑みで答えるナツキに、ではと言葉を繋いだ八雲は続ける。

「着任したばかりの少佐は、まだこの辺りに不馴れでね。君に案内役の任を与えよう。復唱したまえ」
「了解しました。これより案内役の任につきます」

軍靴を鳴らし、敬礼の姿勢で復唱してからナツキは少佐を引っ張って退出した。残されるのは理解の追い付かない隊員と、どうしたものか迷う隊長だけ。
さて？　と言葉を選びながら八名へ視線を送り、そこで声が来る。

一番近い音源は、先ほど少佐と短い攻防を繰り広げた女で。この隊のエースと呼べる存在だ。
ちょっと、とか。なんで？　とかを小さく呟きながら、険しい視線が八雲に向く。

「不満は、この場で全て聞こう。この先、少佐へ向けられるだろう不満をね？　だから、このことに関して彼女に文句を言ってはいけない。何せ、これは私の権限による独断なのだから。ね？」

不満はあるかね？　と八雲が視線を回す先。ゆっくりと横へ流れる視界へ、順に隊員たちの姿が入ってくる。
一人一人と丁寧に視線を合わせていけば、彼女らは首を横に振る答えを寄越した。
隊長がそこまで言うなら、と肩を竦める者。アンタの決定には従うさ、とぶっきらぼうに言ってひらひらと手を振る者。
それらの答えを得て、頷く八雲の視線が最後に行き着いたのは紅目の女だ。
唇をきつく引き結び、手が白くなるぐらい強く拳を握る彼女へ八雲は手を伸ばし。

「良くないね、坂本アヤカ伍長。それ以上は、綺麗な爪が割れてしまうよ？」

握られた拳を解くように優しく取り、しかし手は拒絶を持って容易く振りほどかれる。睨み付ける紅の目と一緒に来るのは、間違いなく抗議の言葉。
なんで？　とかすれる声で一度目が紡がれ。
予想以上に、自分の声がハッキリしない事実へ身を強ばらせたアヤカは。それでも、次の言葉はハッキリした声で紡ごうと二度目の音を紡ぐ。

「なんで？　ずっと、副隊長の席は空けとくと思ってたのに……これじゃあ、あの人の帰る場所が無くなっちゃう！！」
「そうだね。だが、何時までも機能しない役職を放置することは出来ないのだよ。いずれは、上層部が我が隊の副隊長に身勝手な者を任命するだろう」

本当に勝手だね、と失笑する八雲はアヤカの髪を梳くように撫でる。

「この隊は、楽しくなくてはいけない。だからこそ、上官からの任命で来る身勝手な副隊長を受け入れる訳にはいかないからね。彼女の居場所を奪ってでも、この隊を楽しくあるように私は尽力するよ？」

それが約束だからねと心の中で呟く八雲は、再び視線を全員へ巡らせ。更に右手を振って袖を鳴らし。

「宣言しよう。少佐が来ることによって、楽しいこの隊がいっそう楽しく成ることを！！　だから、彼女の居場所を奪ってまで私が少佐を据えたと言うことを！！　必要であれば、私は幾らでも悪であることを！！」

くっと喉の奥から笑みを漏らす八雲は、ここにいない誰かへ語りかけるように口を動かす。
見えているかね？　と前置きして。

「これから、我々はますます楽しくなっていくよ？　早く帰って来ねば、流行に乗り遅れてしまうかもしれない程にね」

はの音の連続で笑う八雲の声が、レクリエーションルームの中に響き渡る。

‡

大きめの丸眼鏡を押し上げ、三つ編みに結った髪を揺らし進むナツキに連れられて歩く少女――九条晶（くじょうあき）は、先日第一一〇小隊へ誘ってきた意味不明な男の事を思う。

と言っても、色っぽい話ではない。単純に、どんな思惑があって自分をここへ連れてきたのかという事について思いを馳せているのだ。

彼女の家系。九条家とはヘイ・アンだかヘイ・ジョウだかの、まるで人を呼ぶ様な名前の時代から栄えているらしい貴族の家柄である。

つまりそれは、絶えず責任を背負うととなり公平な政をこなさなくてはならない。将来、この世界の在り方を担っていく立場に付くという片道切符でもあった。

幸いにして私の祖父は立派な人間だ、と晶は思う。

例え自らが悪役に仕立て上げられたとて、その不正ごと全てを公平にぶった斬っていく豪快な老人。それが彼女の祖父であり、目標としている人物だ。

本人は既に八〇歳も半ばへ差し掛かりつつあるが。医療の進歩と人間離れした肉体を保有する老獪は、未だに現役で各政治家を震え上がらせている。そんな祖父を持ってして、第一一〇小隊隊長は「愉快な男」と賞される存在だった。

そればかりか、彼に第一一〇小隊へ誘われたと私から聞くや否や、祖父は口の端を盛大に歪めて、その常から凶悪だった笑みを五割り増しの威力で発揮して電話を掛け始め。

普段の厳格な言葉遣いなど微塵も感じさせない「やっほー、やっくんお久～☆」から始まり。最後の「おkおk。んじゃあ、そんな感じで手配しとくから。あとよろ☆」で終わるまで、晶を恐怖のどん底へ追い込んだのである。

それは一瞬、本気でここにいるクソ爺は誰だ？　と思ってしまったくらいで。とうとうボケたか、或いは無理が祟って脳味噌が溶けたか。何にせよ、私が引導を渡して差し上げねばと覚悟を決めて銃へ手を掛けた所までいってしまうほど。

下手をすると、トラウマになっていたかも知れない。

「うむ、話は付いた。細かな手配は彼がしてくれるそうだ。明日にでも隊舎に来るよう言うておった。着任期間は一年間、その間に多くを学んでくるが良い」

有無は受け付けんと一喝する祖父は、いつも通り威厳に溢れた老獪の顔だった。

斯くして九条晶は第一一〇小隊、出向副隊長として着任したわけである。

「それにしても九条少佐。まさか、蹴るとは思ってなかったわよ？」

晶へ嘆息混じりに言葉を送るナツキは、白いリノリウムの廊下を先行して歩いている。近年確立された技術によって、壁そのものが淡く発光している廊下に電球などない。

言うなら、この廊下そのものが通路であり照明だ。

そんな全体から均等に照らされる空間の中で、晶は首を傾げる。

「ん？　事前に知らせてあったろ？」

「私は、面白いかどうかを確認するとしか聞いてません」

不思議そうな表情の少女に、拗ねたような咎めの言葉を送りつつ先へ進む。
いま向かっているのは、晶が副隊長として使う事になる私室だ。隊長室、食堂とアバウトに隊舎内の間取りがわかるように歩き回り、その生活空間が案内の最後の場所となっている。
これから最低でも一年を過ごす場所だ。

「だいたいね。この第一一〇小隊で、隊長への暴力とか自殺行為よ？」

わかってる？　と問うナツキに、晶は待ったをかけた。
自殺行為？　とオウム替えしに言葉を紡ぎ、その意味を考える。
確かに事前の打ち合わせがあったとは言え、あの殺人キックの前で微動だにしなかったのは賞賛できる。
しかしだ。もしかすると、あれは身が竦んでいただけかもしれない。反応速度が追い付いていなかっただけかもしれない。もしそうだったとするなら、さした脅威になる事などないだろう。
そもそも、あの奇妙な男がそれほど強いとも思えないのだが。とそこまで思考した晶に、ナツキの追加台詞が来た。

「アキ。あなた、一瞬で隊の八割を敵に回したわよ？」

同期のナツキが、彼女を『アキ』と呼ぶときは何かしらの意味があるときのみである。そして、その意味を悟った晶はふふんと鼻を鳴らし。

「という事は、あの紅目みたいに反抗してくるのが後七人はいるのね？」

面白そうだわ、と呟く同期を背後に吐息して歩きながらナツキは

続ける。

「ここにいるのって、みんな隊長が引き抜いてきた人達ばっかりなのよ。前の副隊長と隊長が、ぐるになって人員確保したわけ」

そう切り出したナツキの言葉を、晶は聞く。

内容としては、要約するとこんな感じだ。

つまり、当時人員不足から機能していなかった第一一〇小隊。それに目を付けた二人組の男女がいて、そこへ能力重視の人員をかき集めたと言うことである。

当然。能力重視であった為に問題児や差別視されていた者ばかりが集まり、結成当初はかなり異様な隊であったらしい。

今でも十分に異様な隊が、昔の方がさらに異様だったとは驚きだ。

隊の正式結成が六年前。纏まりが無かったのも初めの一年のみで、後の四年間は多くの功績を残す『ワンマンアーミー（孤独の小隊）』などと囁かれる存在にまでなっている。

能力が高いだけの隊員たちをかき集めたのが前副隊長。

集まった隊員たちを説得し、認め、居場所を与え、と一つに纏めたのが現隊長。

二人の内どちらが欠けても成り立たなかった第一一〇小隊は、むしろ一つの家族にも近い存在へと昇華しているわけだ。

「で、そのお母さん的立ち位置の副隊長が、去年上層部からの強制で異動になったの。只でさえ母親の居場所を取られて気が立ってるのに、あんな事したんじゃ冗談で済まないわよ？」

ふーん。と気のない返事を返しながら、漠然と自分の状況を理解した晶は。そこで、ふと疑問が浮上する。

目の前の同期は、この隊がある種の家族だと言った。その言葉に違わず、今の晶にはこの隊の全敵意が向けられるだろう。なのに、

なのにだ。
この隊に――家族に所属しているナツキから敵意が来ないのは不思議だ。
何故だろう？　と不思議に思う正面。大きめの両開き扉を差した本人は、これが副隊長室ねと説明しながら振り返り、不意に怪訝な表情となった。
なに、どうしたの？　と聞かれ、いやと言葉を繋ぎ。

「ナツキは、あんまり怒らないな。と思って」
「あら、怒ってるわよ？　私は小隊の衛生兵長だもの。あなたとみんなが喧嘩して怪我したら、治療は私がする事になるんだから」

苦笑混じりな言葉を続けて、それに、と前置きしたナツキは困ったような表情のまま。

「私はアキの次に新参者だから、ここに来たのも二年前よ。前副隊長とは一年しかいられなかったわ。だから、他の子達よりも薄情なのかもね」

目を細め、静かに言ってみせるナツキには哀愁がある。
仕方ないよね、と付け加えた言葉は声が僅かに上擦って震え、まるでダムが決壊する寸前のような雰囲気があった。
どう声を掛けようか迷う様に、視線を俯けて考える。とりあえず当たり障りのない事を言おう、と晶が視線を上げた先。そこにさっきまで無かった風景が追加されている。
ナツキの背後にいる風景は人の形をしていて、且つ腕を一杯に開いた状態であり。

「そんな事はない。そんな事はないんだよナツキ衛生兵！！」

刹那。声と同時に抱擁がナツキを襲う。
がばぁ！！　っと抱きついたそれは、言うまでもなく七海八雲だ。
驚きからナツキの絹を割く悲鳴が鳴り響くが、彼はそれを気にもしない。
そんなに寂しいのなら、私の胸に飛び込んでおいでー！！　とか言いながらがっちりホールド状態の変質者へ向けて、晶は全力且つ的確な蹴りを無言で叩き込んだ。
あとは、推して知るべし。というやつだ。

隊長&オールマイティ
七海八雲（ななみ やくも）
変態　愉快な男
階級、大佐

現・副隊長
九条晶（くじょう あき）
回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
？？？
お母さん
階級、？

フォワード1
坂本アヤカ（さかもと　あやか）

迎撃キック　接近戦最強
階級、伍長

通信士
???

衛生兵・補佐
???

フォワード2
???

陸上特殊車両運用兵士&メカニック
???

航空特殊機体運用兵士&メカニック
???

後方支援1
???

後方支援2
???

衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期
階級、曹長

？　フォワード1、坂本アヤカの場合（前書き）

掴んだものは何なのか
掴めたものは何なのか
それを確かめなくてはならない

？　フォワード1、坂本アヤカの場合

坂本アヤカは、新しく副隊長へと就任した九条晶を信じていない。それどころか認めてすらいない。

この一一〇小隊で初めての隊員は彼女だ。故に彼女は設立当初から席を置く人間であり、現隊長の七海八雲と元副隊長が仲睦まじく殴り合いをしていた頃から知っている。ついでに言うと、二人が着任時に青痣だらけの姿でやってきたのすら見ていた。

しかし、これは正確ではない。本当の事をいうのなら、アヤカは二人よりも前から一一〇小隊にいたのだ。

二人が来る前の一一〇は酷かった。

どこぞの政府で失敗した官僚が天下り同然で逃げ込んできたり、民間警備会社の社長が上層部へ取り入る為のワンステップとして着任したり。まともな上司がついたことなど一度もない。

現行の戦争とは、利権の奪い合いによる副産物であるために非虐殺を謳ってはいる。しかし、いくら世間がクリーンな戦争に切り替わったとはいえ、死ぬ時は死ぬし怪我もするのだ。

あくまで、極力殺さないだけ。必要以上に殺さないは、白旗を上げるまでは殺し続けるのと同じ意味である。

実際、無能な上司の言葉一つで、アヤカも足を失っていた。

当時の事を思い出す。

心の支えとなる根幹の部分。劣悪な泥沼の中から、引き上げてくれた手を掴んだ日の事を。

‡

暗転した視界が復帰したときには、目の前が焦土と化していた。
砲弾だろうか、もしくは敵兵の固有武装かもしれない。とりあえず、何かの兵器が利用されたのだろう。この平原は、そうやって作られたに違いない。
肺が焼けそうなほど痛いのは、熱波をもろに吸ってしまったからか。ふらふらする思考が、記憶修復と状況判断の邪魔をする。

「う、ぁ……」

誰かと言おうとした喉が、意味のある言葉を吐き出さなかった。呻くような声を連続して、ざらざらとした感覚が伴い咳き込んでしまう。
気付けば、どろりと粘つく赤を地面に吐き出していた。荒い息をのみ込もうとして、更にもう一度吐き出す。
地獄だ。どうしてこんなわけのわからない場所で、わけのわからない言葉の為に苦しんでいるのだろうか。仲のよかった同僚たちも、いつのまにかどこかへ異動になったり居なくなったり。自分だけ残された様で泣きたくなる。
だが、感傷に浸っている場合でもない。
単独行動をしていたにもかかわらず、ここをピンポイントで狙われたという事は。つまり、居場所が筒抜け状態だと言うことだ。長居すれば、今度は死亡確認の敵兵がやってくる。

（早く逃げないと）

肩に力を入れ、膝をつこうとしたところで体勢が崩れた。疑問を抱く間もなく、体が仰向けに投げ出される。
痛みを感じない。強かに打ち付けた背中は、肺から空気を追い出すだけで痛覚が遮断されているようだ。もっと言うなら下半身、太腿よりも先の感覚が消え失せているという事に、今更ながら気付か

された。
これはまずい。走れなければ、すぐにでも敵に追いつかれてしまう。慌てて腰の医療キットへと手を伸ばし、中から違法すれすれの興奮剤を取り出す。
この隊で配られた、正規の支給品だから笑える代物だ。
使うのは嫌だが、これを足に注射すれば感覚が戻るかもしれない。いや、もし戻らなかったとしても動くようになるだろう。この場を生き延びるためには必要な処置で、仕方のないことだから。
心の中で、何度かそんないいわけを繰り返しつつ体を起こす。
あとは、足の動脈に注射を――

「……え？」

声が出ていた。それが自分の声だと理解するのに、五秒ほどの時間がかかる。
無い。無かったのだ。感覚が消えているのではなく、そもそも太腿から下は何もついていなかった。これでは、感覚どころの問題ではない。
停止した思考が、ぐちゃぐちゃのまま再起動しようとしている。
ダメという言葉を無視して、わからないことをわからないままにした脳が動き出そうとしている。
どうなるか予想できるというのに、状況判断も行わずに感覚が再接続されようとしている。
次の瞬間には、悲鳴が上がっていた。
誰の声だ。私のだ。
帰ってきた痛みと理解の追いつかない世界とに、両側から挟まれて押しつぶされる。ぺしゃんこになってしまったら、きっともう戻ってこられない。
誰か。誰でもいいから助けて。

「劇的なタイミングだね。いや、狙ったわけではないのだが」

不意に、誰かの声を聞いた。

涙で歪み、揺れ動く視界の端に影がある。

大丈夫だよ、私が来たからもう安心だね？　という男は、手に持った注射器を首へと差し込んだ。

柔らかな微睡みで包まれるような感覚に襲われ、そこで意識は完全にとぎれた。あとはただ暗闇に抱かれて、暖かな体温に全てを委ねるだけ。

緩やかな、これが死なのかと思った。

‡

目を覚ますと、見えるものは殆どが白かった。

天井も壁も、照らされているライトも。銀の器具とそれを操る緑服の人間だけが、室内で浮いているように感じる。

『やあ、お目覚めかね。悪いが、体の負担も考えて局部麻酔のオーダーを出させてもらっているよ』

声が来た。聞いたことのある声だ。

足を無くして、死んでしまったときに聞いたもの。それが、小さなノイズを含んでスピーカーから溢れ出る。

音源は、白い部屋の四隅だ。声に反応した緑服が顔をのぞき込んできて、頷くと壁に向かって手を振りだす。そちらに、音源の発生元があるのだろうか。

『いや、流石だねウィルオウィプス（嫌われ者）君。助かるよ』

「カカッ！　あんたには借りもある。気にするな。ついでに、こっちの新技術を採用してくれたから、また借り一つ作っちまったが。あれ？　これイタチゴッコじゃね？」

疑問のままに首を捻った緑男に、はの連続で笑う声が答える。返事になっていない言葉を横に置き、声は優しく話し始めた。

『坂本アヤカ君。過酷な日々だったね、苦しかっただろうね、そんな君を可哀想に思うよ。なんて無責任な事を言うつもりはない。ただ無言のままに道を示し、無闇に無くしたものの代わりを与え、無駄に力を付与しよう』

ゆっくりと丁寧に発音される言葉が、一言も漏れることなく耳を犯す。

それは、聞く気がなくても無理矢理に割り込んでくる声だった。逃れようはなく、そして、それは同時に放り出す声でもある。ずっと求めていた、助けてくれる誰かではないという証明の声。

淡々と、声は続けて言葉を紡ぐ。

『好きにしたまえ。助けたのは、ただの慈善事業でね。望むのならば、新しい配属先を紹介してもいい。我々は、今後の君がどんな方向を目指していこうが一切関知しない。また、外部の人間に関知もさせないから安心したまえ』

何事も中途半端はいけないからね、と付け足された言葉の意味が理解できない。

どうして誰も助けてくれないのか。中途半端でもいいから、一時的にでもいいから、多くを望みはしないから。だから……

「や、ぁ……」

思わず、言葉にもならない音が漏れていた。喉の奥、肺を押しのけそうなほど動いている心臓から声がくる。
いやだと、もういやだと訴える声だ。それは涙を伴って、意味のある意志に変わっていく。

「やだ……もう、一人はやだ。誰か……誰でもいいから、一人に、しないで」

手を伸ばす。掴んでくれる人を探して、行き先に迷った救いが立ち往生している。
どこに行きたいのか、どうしたいのかすらわからない幼子の駄々だ。自分の子供でもないのに、わざわざ振り向いてくれる人間がいるわけもない。
それならば、と思い。

「家族が。温かな、家族が欲しい」

ぽつりと出た言葉の意味を噛みしめて、それが叶わないものだと理解していた。
そもそも、この利権争いの軍に所属した理由が『孤児だったから』である。生きていく上で必要だったから、路地裏で野垂れ死に直前だったところを軍へ志願したのだ。
当時は、年少時から優秀な軍人を育成するというプログラムに感謝もしたが。だが、それが今に結びついてしまったのは皮肉だろうか。

「お父さんと、お母さんが欲しい。兄弟も姉妹も、私が持ってなかった温もりが全部欲しい！」

欲張りだろうか、という思いが頭を上げそうになる。こんなに望んで、叶うはずのない思いをどこに押し込めるのかという不安もよぎっていく。

結局は手には入らないものを要求して、意味などあるのか。止まらない嗚咽混じりの呼吸を乱して、何かすがる物を手探りに探す。

足がないのだ。ならば、どこにも行けない。すがる物を求めるどころか、もう孤独から逃げることも出来ない。

「全部、欲しいよぉ……」

最後の力を振り絞った声は、やはり行き場がわからずに迷っていた。

ずっと一人でいられるほど頑丈ではない。きっと、どこかで動かなくなってしまう。それも、誰が気付くこともないままに一人きりで。

いやぁ……やだぁ……と駄々が溢れ出し、滲む視界が暗転していく。

孤独だった。助けなどない、怖い世界に放り出されてしまった。顔を覆い、耳を塞いでうずくまりたくなる。

「それが、君の願いかね」

静かで優しい声が、すぐそばに来ていた。戦場で聞き、スピーカー越しだった声が隣に立っているのを感じる。

「では、君の望みを叶えようではないかね。今日から、私が父親だ。母親もちゃんといるし、時期に兄弟・姉妹は増えるから心配いらないね」

「なに、言って――」

戸惑いでぐちゃぐちゃになる思考を落ち着けるために手が来た。髪を整える動きで、頭を数度撫でられる。
温かかった。これまで感じたことがないほどの安堵感に、全身の力が抜けていく。

「よく頑張ったね。アヤカ君、君は実に優秀だよ。これまでたった一人で、よくぞ耐え抜いた。そんな娘が持てて、私は誇りに思うよ。だが、もう我慢の必要はないね」

停止した脳の隙間へ、滑り込むようにして声は続ける。
抱き抱えられながら上体を起こされ、邪魔な涙も大きな指で払われた。人の体温に体重を預けながら、正面――かつては足があった場所を見る。
「優秀で寂しがりな我が娘へ、親バカな父としてはプレゼントがしたくてね。無くしたものの代わりを用意させてもらったよ。今度は逃げるためではなく、みんなで歩くために使ってほしいね」
そこに、足があった。意識すれば、ぎこちないながらも反応が返ってくる足だ。
足の更に向こう。ウィルオウィプス（嫌われ者）と呼ばれた緑男が、火の点いていない煙草をくわえて数度頷く。
新しい足の各部をチェックするためか、爪先から太腿までをなで回し頬ずりまでした。勢い的には舐め回しそうなテンションで、ひゃっほおおおお、成功だぜぇい！！　と盛大に騒ぎ出した瞬間、首の後ろを何かに射抜かれた。
それは銀色の医療具――メスであり、服を貫通して壁に縫い止める軌道だ。
え？　とウィルオウィプスが首を傾げている間に、両腕と両足の裾を同じように射抜かれる。
「あれ？　ちょっ！　これが噂の死亡フラグか！？」

「人聞きが悪いね。ちょっと危険なダーツゲームだよ」
「ああ、やめて！　新しい世界とか見えちゃいそう！！」
「はははは。やってみるかねアヤカ君」

全力で首を左右に振って、以降はそちらを見ないように努力する。
痛い。痛いけどこれはこれで、いやそんなことはなかった！！
なんて声は、少しも聞こえない。

「そういえば名乗り忘れていたが、七海八雲というのが私の名でね。階級は大佐。着任は少し先になるが、一一０小隊の隊長になることが決まっている。ああ、安心したまえ。あんな無能のところにアヤカ君を置いていったりはしないよ。その足のリハビリとデータ収集の名目で、保護観察扱いにしてあるからね。新一一０が立ち上がるまでは、私のところに来るといいよ。そのときに母親の方も紹介しよう」

では移動だと楽しげな八雲に抱き上げられ、体が僅かな浮遊感にさらされる。ふわりと心地よい感覚の後に続くのは、お姫様だっこによる運搬だ。
こんな事はされたこともないので、なんだか気恥ずかしくなってしまう。首を竦めて、熱をおびた頬が見えないように顔を伏せる。

「おいおいおい、ちょっと待て。あんたせめて、この状況くらいは解除してってくれない！？　というか、途中経過とかどうする気だよ？」
「ああ、この『韋駄天』の事なら資料をコピーしてあるからね。今夜中に目を通して、リハビリの内容を考えるよ。それでも問題が起こったら、そのときは呼び出すけれどね」
「コピーって……それ一応、開発局の機密なんだがなあ」
「問題ないよ。どうせ上はこんな物に興味はないし、何より雁首そ

ろえて無能が多いからね」
「もの凄いこというなあ。ついでに、俺の開発した『韋駄天』けなすのやめてくれる？」

そんなつもりはないよ、と八雲はウィルオウィプスの近くへ歩き出す。彼が歩くごとに、波間を漂っているような気持ちになった。
ゆっくりと上下に揺れる動きは、赤子をあやすときのそれに似ている。

「こんなくだらない戦争で、無くしてしまった四肢の代わりを提供する君をけなすはずがないね。多くの灯火を集めるジャック・オ・ランタン、上層部から嫌われる救いの火種。今後も大いにやってくれたまえ。素晴らしい出来の手足を、誰かれかまわず与え続けるといいよ。そんな君を、私は誇らしいからこそ支援しているのだからね」

不意に、二枚の楯が降り注いだ。
それは八雲とウィルオウィプスの間に割り込み、刺さっていたメスを全て弾き飛ばす。小さな金属音と共に拘束は外され、地面に着弾する直前で旋回する挙動へと切り替わる。
両側を廻り込むように背後へ流れ、合流する足音の元へと帰っていった。

「まだこんなとこにいたの？　人に戦後処理させといて、優雅に女の子抱えてるなんて。浮気？」
「話が飛躍しすぎてないかね？　それに、どちらかと言うと隠し子だよ。今日から、我々の娘だね」

あら、それは素敵だわ、とどの基準で判断しているのかわからない女が近寄ってくる。

背中から二本のアーム、その先端には鉄板が二対。まるで鋼の翼を背負う様に立つ女は、にっこりと微笑んで頭を優しく撫でてきた。

「私、男はこの莫迦だけでお腹いっぱいなのよね。娘が欲しかったの、それもいっぱい。あなたが、その娘一号よ」

新しい両親と新しい両足。手に入らないと思ったものが、一気に手元へ流れ込んでくる。

許容量はとっくに超えているし、手に入れた幸せを実感する余裕すらない。それでも溢れ出した涙は、先ほどまでと違う意味を持っているのだろう。

もう苦しくないし、怖くてたまらなかった涙を流しても辛くない。

「ちょっと早くなってしまったが、彼女が母親だよ。しばらくは三人暮らしだね。イベント的には家族旅行で絆を深めるところから始まり、お父さんの洗濯物と一緒に洗濯しないでというところまで行けそうだよ」

「ホント、八雲は莫迦ね。洗濯物なんて、分けるに決まってるじゃないの。もちろん、自分のは自分であらうのよ？」

「自らの嫁から拒否られた場合、夫はどこへ行けばいいのだろうね……」

さあ行きましょうと無視を決め込んだ女の後に、肩を竦めて八雲が続く。

安らかなゆり籠と、耳に心地いい鼓動が意識を満たす。眠気はすぐにやってきて、次に起きた時は三人揃って川の字に寝ているのだろうか、などと幸せな気持ちが支配を始めていた。

さっきの口ぶりなら、まだ家族は増えるのだろう。まだ見ぬ兄弟・姉妹を思い描いて、無抵抗にまどろみへ落ちていく。

意識の遠いところで、もう来るんじゃねえ！！　と誰かが叫んで

いた。

隊長&オールマイティ
七海八雲（ななみ やくも）
　変態　愉快な男　お父さん
階級、大佐

現・副隊長
九条晶（くじょう あき）
　回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
???
　お母さん　鋼の翼
階級、？

フォワード1
坂本アヤカ（さかもと　あやか）
　迎撃キック　接近戦最強　義足　最初の娘
階級、伍長

通信士
???

衛生兵・補佐

？？？

フォワード２
？？？

陸上特殊車両運用兵士&メカニック
？？？

航空特殊機体運用兵士&メカニック
？？？

後方支援１
？？？

後方支援２
？？？

衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期
階級、曹長

？　通信士、真衣・プロセッサの場合（前書き）

諦めの気持ちがある
諦めない男がいる
正しいのはどちらだ

？　通信士、真衣・プロセッサの場合

少女。真衣（まい）・プロセッサにとって、世界とはくだらないモノだった。

未だ幼い容姿の彼女は、しかし年不相応の能力を有している。

薬や機械で脳を調整して、身体のあちこちへ小型電子部品を詰め込んでいく事で完成する。感覚を端末に繋いで情報処理演算を可能とした、属に『エリート』と呼ばれる者が有する能力だ。

本来あった右腕を切り落とし、代わりに端末へ直接接続可能なユニットを搭載した義手が取り付けられたら瞬間。彼女にとって、世界はどうでもいいモノへと成り下がったのである。

人間を止めて手には入ったのは、電子端末と会話をする能力。とでも言えば聞こえはいいが、実際は右義手から伸びるコードで接続して頭の中に直接流れ込んできた情報を超高速分割演算しているだけに過ぎない。

私自身が、進化した電子端末なんだ。だから、自分を引き取りに来る『持ち主』がそのうち現れる。そう思って、彼女はその瞬間をずっと待っていた。

‡

「ん？　んん？　つまり、ここを押せば通信プログラムが立ち上がって、大規模通信環境における情報のやり取りができるわけだな？」

「少佐、ネットって言葉知ってる？　流石にこれはアレだよ？　ちょっとやばめだよ？」

人差し指で恐る恐るキーボードを叩く晶に、真衣は眉根を寄せた

表情で答えた。
　このご時世になっても端末を触った事がないらしい莫迦――もとい現副隊長を見兼ねた八雲が、最低限の手解きくらいはしておいてくれないかとやってきたのが数時間前。
　ようやくネットという物の概念を理解させたのだが、彼女は真衣の予想を大幅に超えるほどの手間を要求してきた。
　ぶっちゃけ、こんなのはさっさと終わらせて書類の整理や積みゲーや趣味のハッキングに向かおうとしていたわけだが。そんな予定を考えながらの片手間ではどうにもならない事ということを理解するまでに、それほどの時間はかからなかった。
　むしろ、今ここまで理解させた事は一種の奇跡かもしれない。私って超凄い！！　と過信出来るくらいにはとんでもない労力だったわけである。

「ふむふむ。『ぱそこん』というやつは奥が深いな。この『ねっと』を使うと地球の裏側にいる誰かと連絡が取れると聞いた。電話でよくないか？」
「わあ、せっかく教えてあげたのに電話とか言ってるこの人。ねえねえ、少佐。ぶっちゃけ、今まで報告書とかどうしてたの？　私的には、データ提出が主流なのに疑問でならないんだけど」
「ああ、書類？　私の所には、紙媒体の重要書類しか回ってこなかったな。何故か、前の部下たちはとても多忙だったけど」

　見た事もない部下の人たちに、思わず真衣は労いの言葉を投げそうになってやめた。良く考えてみたら彼らは今、問題の上司がいなくなって仕事が楽になっているということである。
　どうしてさっさとモバイルの使い方くらい教えなかったのか。あとで、逆恨み的にウィルスでも投入してやることを決心しながら視線を正面に戻す。
　そこには少し目を放していただけにもかかわらず、画面を埋め尽

くすほどのエラーウィンドウを発生させている莫迦がいた。
何をどうやったら、そんなにも器用極まりない事が出来るのか教えてほしい気持ちを抑え込む。
ともすれば、これを観察する事によって新ウィルスとか作れるかもしれない。そうポジティブに考えつつ、真衣は鋼の義手で晶の頭を殴った。
アヤカの足と違って接続端子である精密機器の塊だが、とてもいい音を隊舎内に響き渡らせる。

‡

彼女ら『エリート』達が勉強し、その様子がそのまま能力のプレゼンテーションになる場所――『スクール』。
月に一度。そこでは授業参観が行われており、沢山の軍人や政治家などが集まって来る。選別して、優秀者を引き抜くための会場である。
つまるところ、この学び舎はショーウィンドウも同然の施設だ。ガラス壁の中でディスプレイされている人形を、一つ一つ吟味して買い物リストに書き込んでいく。
ここは、そんな優しい監獄だった。
その『スクール』の中でも、指折りの『エリート』である真衣が売れ残っていたのは、一重に彼女の高性能すぎる故の欠陥が原因だろう。
あまりにも致命的な、それでいてどうしようもない欠点。自身を人形だと思っているからこその、どうしようもない破綻がそこにはあった。
当然、彼女ら『エリート』にだって人権はある。否、薬品や部品への適合率の事を考えると、その絶対個数が少ない彼女らは厳しい

権限によって護られていた。
機械を埋め込まれた人形ではなく、機械を埋め込んでまで社会へ貢献してくれている人間という扱いで『エリート』たちの安全は保障されている。
しかし、それを彼女は受け入れない。それどころか、出されたオーダーは拒否の一つもなく実行してしまう。例え、それが処理能力を大幅に上回っている為に脳細胞を潰してしまう様なオーダーだとしてもだ。
本来ならそう言った無理なオーダーを拒否し、絶対個数の少ない『エリート』を保護するための権利が働かない。それらが自己申告でしか行使出来ない権利だからこそ、自身を扱われるだけの人形と認識する真衣・プロセッサには適応されない権利なのである。
これでは、自殺志願者と同じだ。そんな面倒な人間を欲しがる部署は無く、また『エリート』を過剰労働で殺した。などという不名誉な記事を書かれたくない政治家も敬遠していた。
ある意味で、彼女はとても有名で有能な『エリート』だったわけだ。

「初めまして、真衣・プロセッサ君。私と一緒に、世界征服とかしてみないかね？」

そこまで有名だった彼女に、わざわざ話し掛ける物好きなど殆どいるはずもなく。突発的で唐突に湧き出た男の存在は、彼女を少なからず混乱させた。
意味不明な存在が、彼女の通常処理能力を大きく上回っている。どんな人間で、どういう立場の生き物であるかすら読みとることが出来ない。
答えぬ少女に、正装の軍服を着た男は疑問の声を出す。

「おや？　おかしいね。君は、とりあえず言われたことに『ＹＥＳ』

と答えるイエスマン――もとい、イエスちゃんだと聞いたんだが……今、世界中のキリスト教信者に喧嘩を売らなかったかね？　私は」

会話が成り立たない。

そもそも真衣が口を開いていないのだから、会話になるはずもないのだが。しかし、そんな事はお構いなしに男は喋る。

世界屈指の聖人キリスト様は、その御業で人々を救いたもう。という話から、何故か今の世界情勢の話になり。それは「まあ、ぶっちゃけ世界情勢とかどうでもいいのだけどね」と無責任な言葉で締められて、勢いを失わぬまま何故か昨日食べた美味しい茶菓子の話へ移行する。

ここまで無秩序に超人的な速度で喋られたのでは、情報の演算どうこうの問題ではない。人類最高峰の演算能力を有する『エリート』の中でも指折りの存在は、話の要点が理解できずに思考が停止していた。

どうしていいか困惑したまま、目を白黒させている少女へ男が手を差し伸べる。なぜそんな流れになっているのか、全くと言っていいほどわからない真衣は言葉を聞く。

「と言うわけでね。うちの隊へ引き抜かせて欲しいのだが」

「何が、と言うわけでなのか。今の会話の中からは、全く理解できない」

「つまり、アレだよ。聖母マリアの受胎が核融合であぼんして、後のゲオルギウス君がオリンピック槍投げで優勝わーい。という話でね」

「……キリスト教、そんなに嫌いなの？」

気のせいではないかね？　と首を捻った男は、そのままはの音を連ねて笑う。

やはり、話の意味はわからない。

最初の世界征服というのが嘘なのは明白だが、何を持って自分のような敬遠される個体を欲するのかが彼女にはわからなかった。
絶対個数が少ないとは言え、未だ配属の決まらない『エリート』など他に沢山いる。そちらを起用する方が、部隊運用が楽なのは本人でも知っていることだ。
だが、そんな真衣の困惑すら無視して男の言葉は続く。

「中途半端で凡庸な能力を、我々は求めてないものでね？　手続きは終わっているし、後は君から了承を得るだけなのだが？」

どうだろう？　と問うた男の言葉に真衣は迷う。そして、迷った事実に驚いた。
健康診断も、定期テストも、限界突破演算能力実験も。この男と逢う直前までは、全てに「はい」と答えていたというのに。そんな自分が、ここにきて何故迷っているのかが理解できない。
どうかね？　と答えない彼女に、男は再度問い掛けを放つ。きっと、答えがあるまで何度でも同じ事を問うのだろう。

「……か、考える。次の『授業参観』までには答えるから」

ようやっと彼女から出た言葉が、それだった。
何て不明瞭な答えだ。と内心で歯噛みする真衣とは反対に、男は大して気にもしていないらしい。懐からタッチパネル式の小型端末を取り出して、スケジュールの確認を始めている。
次の授業参観は五日後か。書類を一日で片付けて、指揮系統の統合を。としばらく呟いていた男は、頷き一つで操作を終わらせた。
端末を懐へ仕舞い、片手を挙げ。

「では約束だね。色よい返事を期待しているよ」

軽い挨拶を済ませると同時、男は全力疾走でその場から離れていった。
半ば跳躍の連続を思わせる高速移動は、ギアを三段飛ばしくらいの勢いで疾駆の領域に達する。

‡

最初こそそうでもなかったが、最近は求められる事など全くなかった。故に、突然自分を求めてきた男に困惑したのだと真衣は判断する。
どうすればいいのか迷いに迷い。わからない事を勉強する為、ネットに潜って男の個人情報を洗い出した。
名は七海八雲。階級は中佐だが、あと一週間で大佐への昇級が決定している。第一一〇小隊の引き継ぎ真っ最中で、隊員を集める傍らに仕事をしているらしい。
それでも着実に戦果を挙げ、デスクワークをこなし、人脈と情報網も完璧に構築している。正しく、天才が努力を重ね昇華した存在と言っても過言ではない。……たぶんないと思う。
そんな人物が、やはり自分のような個体を呼び寄せる意味がわからない。
本当にどうしようか？　そう悩みの迷路に突入しそうになった瞬間、それは偶然に見付かった。
上層部に提出されたらしいスケジュールデータに、八雲の名がある。それも授業参観の日を跨いで、翌日まで『反政府ゲリラ掃討』と書き込まれたデータがだ。
見つけた瞬間、真衣の肩から力が抜けるのを感じていた。
戦闘地域は遥か北の地、シベリア。どう足掻いても、七海八雲は授業参観に出席する事が出来ないだろう。それが安心なのか残念な

のかはわからないが、少なからず肩の荷がすっかり解消されたわけである。
果たして参観日当日。そこにはボロボロの戦闘服を着た七海八雲が、他の正装した人物たちの不審な視線も気にせずに、両腕を組んでど真ん中に立っていた。
正装用の軍服ではないそれは、ウェットスーツの上から装甲を取り付けた七海八雲専用の戦闘機動補助スーツ。
通信機付のヘッドギアと、固有武装らしい棺桶を思わせる鋼の箱を廊下に置き。やはりボロボロのコートでスーツをある程度隠しながらの出席。
目の下には隈がある。ここへ来るためだけに、相当な無理をしたらしい。
絶句。声もでない真衣を見つけた八雲は、本人に近付き問う。
「私の隊に来たまえ、真衣・プロセッサ君。流石に一日で鎮圧は出来なくてね、一応の膠着状態を作ってここに来た。当然、長くは保たないだろうね。故に、即刻の返答を貰えないだろうか？」
問いの声こそ相手を急かさぬように気遣った速さで紡がれているが、焦っているのは本当らしい。よくみると額には薄く汗が浮いていて、肩も呼吸を押し地つける様に浅く上下している。
イエスでもノーでも、聞いた瞬間に行動が起こせるよう身構えているのだろう。それが証拠に、起動補助スーツのバックパックも動力がオンになったままである。
正直、八雲が来ないと思っていた真衣は答えらしい答えなど用意していなかった。
つまり、思わず「行きます」と答えてしまったのは、本人にも与り知らない場所で起こった反射運動の賜物だ。
自身で言った言葉に、えっと声を漏らして困惑し。それでも、視線は何とか八雲へと合わせる。

彼の返事は頷きだった。
深くゆっくりと首肯して、口を開く。
「では、今すぐ能力を借りよう。少々厄介な相手とやり合っているんだがね。作戦の伝達が悪過ぎる。優秀なオペレータが必要だよ？」
必要とされる感覚を久しく思い出した真衣は、ただ力強く肯定の言葉を口にする。
それが、幼い少女が生きる意味を見付けた瞬間。同時に、八雲の家族になった瞬間である。

‡

「と言うのが、この隊の通信士。真衣・プロセッサ軍曹との成り立ちなのだがね？　晶少佐。君から聞いてきておいて、居眠りはどうかと思うよ？」
八雲が吐息して呆れる先。暖かな日差しを浴びている中庭で、九条晶はうつらうつらと首を落としていた。
名を呼ばれて、ようやく意識を覚醒させつつ。
「ん？　すまん。あまりに嘘っぽいのでつい、な」
「ふ、む。確かに。彼女は随分性格も明るくなったからね。そう思うのも無理はないのだが……ああ、そうそう。あの時、真衣君とは一つ約束をしてね。性格上無茶をしてしまう彼女を――」
隊長隊長っー！！　と不意に少女の声が割り込んでくる。説明を中断した八雲は視線を巡らせ、声の主を視界にとらえた。

隊舎の廊下、その窓から顔を出しているのは話題の真衣・プロセッサである。
ぶっちゃけ幼女と言っても過言ではない彼女は、窓からギリギリ顔を出して手を振り。
「個人情報ってねーっ！　一回ネット上に流出すると、完全回収は不可能なんだよーっ？」
「了解したっ！　約束の事は伏せておくから、勘弁して欲しいものだねっ！」
もう一度だけ元気よく手を振った真衣は、そのまま窓の向こう側へ消えて行く。
唯一第三者として見ていた晶は、眉根に皺を寄せ。
「今、どうやって私たちの話題を嗅ぎ付けた？」
「さてね。そういうネットワークでもあるのだろうと思うよ？　あと、ここの場所がばれているということは少佐も逃走劇は終わりだね。逃げるのはいいが、諦めて真衣君にネットの指導を受けてくるといいよ」
嫌そうに表情をしかめる晶に、八雲は真衣が消えていった窓を指し示す。そこにはいつの間にか一枚の紙が貼ってあり、短いアドレスと一緒に「解除ＯＳのダウンロードサイト」という文字が書き込んであった。
なんの事だ？　と首を傾げた動作に連動して、不意にモバイル端末の着信音が鳴り始める。
音源を探るように二人してポケットを漁り、沈黙しているモバイルを八雲が取り出したところで異変が起きた。
着信音が、何故か最近流行りの日曜朝十時からやっているアニメのオープニングテーマに切り替わったのである。

え？　という声は、二人とも同時だった。
ようやく自分のモバイルを引っ張り出した晶が、たどたどしい手つきで何やら操作しているが。音は止むどころか、作中でキメ台詞や技名を交えたパワーアップバージョンへと進化していく。

「おお、なかなか手が込んでいるね。こんなＭＡＤを短時間で作るとは、流石だよ」
「え？　ちょ、感心している場合じゃないだろう！　これ、どうやったら止まるんだ？　なっ、なんでこちらからの動作が全部エラーになるんだ！？」

これも授業の一環なのだろうねえ、と思いながら八雲は笑う。
まずはＵＲＬを入力しなければいけないという事実に気付くのと、逆上した晶がモバイルを叩き付けて壊すのはどっちが先だろう。そんな事を考えながら、いつの間にか恥ずかしい台詞集に踏み込んでいるＢＧＭを聞きつつ空を見上げた。
雲ひとつない晴れ渡った青空の先。大気圏も突き抜けた場所から見降ろす衛星を介して、そんな状況を見ている真衣も思わず笑顔がこぼれていた。

隊長＆オールマイティ
七海八雲（ななみ　やくも）
変態　愉快な男　お父さん
階級、大佐

現・副隊長
九条晶（くじょう あき）
　回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
？？？
　お母さん　鋼の翼
階級、？

フォワード1
坂本アヤカ（さかもと　あやか）
　迎撃キック　接近戦最強　義足　最初の娘
階級、伍長

通信士
真衣・プロセッサ（まい-）
　電脳幼女　指折りの『エリート』　腹黒
階級、軍曹

衛生兵・補佐
？？？

フォワード2
？？？

陸上特殊車両運用兵士&メカニック
？？？

航空特殊機体運用兵士&メカニック

？？？

後方支援１
？？？

後方支援２
？？？

衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期
階級、曹長

？　衛生兵補助、瞑愛琳の場合（前書き）

もてはやされ
貶められ
次は、何を求められるのか

？　衛生兵補助、瞑愛琳の場合

初めての称号は天才児だった。
齢にして十歳と少し。そんな低年齢で、一般的な教育をすべてパスしたときに与えられたものだ。
よくアニメに出てくる天才と同じ事をしたかっただけで、特に目的があったわけじゃなかったけど。周りにいる誰もが私を誉めて笑顔になる。そんな風景を見るのは悪い気がしなかった。
父と母も心から喜んでくれた。そして、なんでも望む物を用意してくれた。
何を言ってもダメとは言わない。眉根を寄せて、口の端をぎこちなく歪めて笑いながら誉め続けてくれた。
そうして、しばらく過ごす内に二度目の称号はやってきた。
天才という単語の前に『狂喜の』という言葉を付け加えることによって。

‡

世界中が統合され、軍が一つに集束され。そうなれば、その軍は何と戦うのか。
テロリスト、レジスタンス。そして、友軍だ。
規模の大きな組織が一枚岩でない以上、派閥間の争いは当然のように存在し。そのどうでもいいような争いに軍が巻き込まれる。
先週は共同戦線を張っていた第一一七特殊機甲隊が、今や第一一〇小隊と激突しているのだから良い例だ。
爆音が響いて、起伏の激しい高野で誰かが吹っ飛ぶ。

絶叫も掻き消したそれは、第一一七特殊機甲隊が保有する固有兵器の威力発揮。超大型天候操作ユニットを使い、頭上から雷の一撃を見舞う代物。まるで神の鉄槌でも下すかのように見えるそれは、コードネーム『デウス・マキナ（神の権威）』と呼ばれる兵器だ。

「全く、あんなものをバカスカ撃たれたんでは地形が変わってしまうね。ナツキ君、四時の方向に負傷者！！　一〇四の役立たずだが、助けて恩を売っておきたまえっ！！」

はーい。と遠くから微かな返事があるのを聞いて、八雲は頷く。

続けざまに手信号を辺りへ送って、リアルタイムに更新される戦況報告を端末で見つめながら。

「で？　愛琳君。瞑愛琳（メイアイリン）君。傷の手当ては終わったかね？」

声が放たれた方向は、彼の真横。セミロングの黒髪をサイドアップで纏め、僅かに目尻を下げた少女がいる。腰に簡易医療キットの詰まったポーチを装備する彼女は、衛生兵ナツキの助手という立ち位置だ。

白いブラウスにショートスカート。まるで、学校の制服のようなそれを着て包帯と格闘する姿は非常に微笑ましい。

肩を抱き寄せ、流れ弾から愛琳を護りつつ八雲は思う。自分に出来ない事を理解して、この子はとても楽しそうにしていると。わからない事があるからこそ、まだまだ上を目指して行けると。

不意に背後から小石が飛んできた。コツンと頭へ着弾したそれに応えて振り向けば、紅の双眸がこちらをじっと見ている。どこか咎めるような視線である事に苦笑を返すしかない。

愛琳と同じ服装にスパッツを履き、脚にはいつもの編み上げブーツを履いている。右肩に装備された防御装置がフル稼働していた。

手信号が来る。内容は、いちゃついてないで仕事しろ。

ふむ、と呆れの混じった息を吐く。答えはやはり手信号で作り。

『これでも、怪我人なんだがね』

『死ね』

なかなか辛辣な答えが来たね、と頬を掻きながら待つこと数秒。罪悪感のせいか、こちらを見ようとしないアヤカから追加の手信号が来た。

『ごめん。やっぱ今の無し』

思わず、失笑が漏れる。

微笑ましい限りだと頷いて、視線を隣へ戻す。もはや包帯に絡まっている愛琳を見て、更に二度頷く。

これなら問題はない。まだ、この一一〇はやっていけると確信を得る。

新しい人材を放り込んだことで、それぞれに戸惑いはあるだろう。しかし、その程度で揺らぐような娘たちではない事を再確認した。

「ならば、私もそれに応えなくてはいけないね」

く、と喉を鳴らして笑う。

笑って楽しく、傍らに置いた武装。棺を思わせる鋼の塊を撫でた。

‡

やったことは単純。死んだ動物を生き返らせただけだ。いや、より正確には『生き返ったように見せただけ』である。

実際は死んだ組織の代用になる機械を注ぎ込み、それまでの行動パターンをデータ化して再現しただけだ。
犬や猫程度なら、生きていた頃と変わりなく動き回る。
機能しなくなった脳を無視して、体は活動を続けていく。
何が違うのか。これまでと同じように動けば、それが望ましいはずである。
どうして誰も喜ばないのか、まったくわからなかった。

「天才少女にもわからないことがあるのかね」

声が降って湧く。
広い研究室で一人だけ置き去りにされ、黙々と研究する事だけを求められる日々。もう、実験結果すら書面でしか確認されなくなった頃。
その声は、不意に割り込んできたのだ。

「わからない、と思うのはいいことだね。それは、もっと、と願うことの同義だよ。欲張り、まだ足りないと求めることでもある」

にこりと、それは笑う。
わからない。誰もやってこない場所に、なぜそれが来たのか。どうして楽しげに喋っているのか。
この思いも、もっとを願う意識なのだろうか。

「楽しく嬉しいから笑うし、君に会いたいから来ているんだよ。それは、わからないではないね。きっと、わかりたくないの分類だろう」

そして、それは手を差し伸べてこう言う。
ほら、と招きの声を発しつつ。

「もっとを願うなら、手を出したまえ。私もまた、もっとを望み、そうして踏み込んでいく者でね。旅は道連れと言うし、君も一緒に行こうじゃないかね」

無茶を言う。

いったい、どれだけの保護規約がこの部屋に存在するか。この男が知らないはずはない。

ここに入るだけでも、徹底的なセキュリティチェックを受けているはずだ。それがイコールで、檻の分厚さを物語っている。

出られるはずがない。ずっとこのまま、望みもなく一人だ。

「君は昔の私と、ほんの少しだけ同じだね。そして、そんないじける子供の扱いを、私は既に身を持って教えられたよ」

刹那、室内の照明が真っ赤に切り替わる。警戒の意味を持つ色が、部屋の中を満たしていた。

疑問を持つ暇もない。

あまりに急展開のまま、入り口のドアが吹き飛ぶ。更に黒の棺を思わせる物体が放り込まれ。

「そんな可愛い娘を、あなたみたいなやさぐれと一緒にしちゃダメよ？」

ドアの向こう、銃弾の雨を防ぐ誰かがいた。

声は女のもので、破砕の音も同時にやってくる。

わあ、と蹴散らされる兵士たちの声も混じり出した頃。黒の棺を肩上に担った男が、もう一度手を差し伸べてきた。

「この施設は、第六五〇総合研究大隊の直下施設でね。大義名分と、

利益の損得さえ発生すれば攻撃可能施設なんだよ。そして、ここを全て灰にすれば君を縛るものはなくなる。とりあえずはそこまで、出来るならその先まで、一緒に行こうじゃないかね」

出ていけるのか。ここ以外の場所へ、望みのままに。だが、そもそも願ってまで行きたい場所がどこにあるのだろう。

迷い躊躇う手が、中途半端に虚空を舞い。自由の重さに耐えられず、墜落しそうになった。

手が来る。差し伸べられていた手が、こちらの手を強引に掴む動きだ。

「一緒に来たまえ。損はさせないし、きっと楽しくなるよ。なんせ私の願うもっとは、もっと楽しくだからね」

柔らかく笑む男の肩上、担われていた黒い棺が展開をはじめている。

展開前の状態で、既に二メートルほどの全長があった。それが今、中心線を軸に上下に分かれて展開していく。

まるで、折りたたみナイフのようだ。

半円を描く軌道で下側が回転し、二〇センチほど戻るようにスライドすることで上側へアジャストする。

砲だった。気付けば、二メートルの棺が三・八メートルの長大な砲へと変化していく。先端部が更に割れ、獣が口を開くようにしてスリットを作り出した。

最早、それがただの砲には見えない。フレームに彫られた銘――ピナカ＝トリシューラの名の通り、槍のようにすら見えてくる。

砲にしては長く大きすぎ、槍にしては幅と分厚さがありすぎた。どちらでもない中途半端な兵器が、軽々と振られるだけで天井を削り崩す。

「さあ、楽しんでいこうかね」

同時、砲撃を放つ。

膨大な熱量が、空間を一閃した。

‡

「真衣君。ユニットの位置は特定できるかね？　こちらも、固有兵器を展開して対抗しようと思う」

『ちょっと待ってくださいね、隊長。なうろーでぃんぐ！』

八雲の通信に、ヘッドギアのスピーカーから幼くも明るい声が応えた。

一定間隔で『なうろーでぃんぐ！』と言い続ける向こう。平坦な囁きの音で、ハッキングだとか衛星画像の解析などという単語が聞こえてくるが。これらを意識的に無視して、その結果を待つ。

未だに、真衣の無茶をする癖は治っていない。しかし、それも通信車両の容量を抑えることで予防はしてある。

一度に扱える情報の量を制限してしまえば、彼女の脳に不可がかかることも抑えられるし。本人の演算速度に変更を加えるわけではないため、他の『エリート』とも互角以上にやりあえるはずだ。

子供が楽しむのを邪魔しないように護るのは、親として当然の務めだと思う。何事もやり過ぎは良くない。適度な注意に留めて、自由を奪わないよう気を付けるべきである。

いい父親っぷりだという自覚を得つつ、ＴＰＯをわきまえているので表情には出さない。今は仕事の真っ最中だ。

愛琳の医療キットから皮膚再生フィルムを拝借して傷口に張りながら。

「愛琳君、治療はもう大丈夫だ。代わりに、いつもの身体強化ナノマシンを頼めるかね？」
「あ、はい。それだったら、最近新型を作ってみたので試しますね」
「せめて疑問してくれないかね。前回のように、亜音速機動の代償として膝間接の粉砕とかは嫌だよ？」
「ばっちりです。私の祖国では、三千年の歴史は偉大なんだそうですよ！」

ポーチからアンプルを出した愛琳が、満面の笑みでそれを差し出してくる。
医療系ナノマシンの確立は一〇年前からとか。それをいつも言って、成功率は五分五分とか。
この際、その辺りは総無視しようと八雲は思う。言うだけ、自分の恐怖心を煽るだけだ。

「信じているよ愛琳君。医療系ナノマシン確立の立役者。更には、そこから発展した身体強化系ナノマシンの第一人者として」
「期待には応えちゃいますよー。と言うことで、ぐぐっとどうぞ」

確か、意を決するときは「ナムサン」とか言う人の名前のような呪文を唱えるといいとか祖父が言っていたかね。と呟いて、ナムサン！！　と叫んでから、八雲はアンプルの中身を空にする。
瞬間。一秒が二〇倍に引き延ばされた。
アンプルの中身は感覚操作系のナノマシンだったらしく、景色も動きも自分の行動でさえもスローに感じる。それは音も動議であり、目の前で喋っている愛琳の言葉は意味が理解できない。
思考が鈍っていないのは、ナノマシンに思考高速化の作用が付与されていたからだろうか？　と首を傾げながら、手信号を使った。

『悪いが、何を言っているのかサッパリでね。世界共通語を話してほしい』
『あ、理論通りの反応ですね。思考が追い付いているなら成功です。これで、慣れれば弾丸とか余裕で避けられる設定です』
『身体能力に変化はないのだから、それは無理だと思うがね？　あと、意志疎通が非常に面倒だよ？』

あはは、と苦笑いしているらしい愛琳に吐息で返答。それと同時に、端末が通信を受け取って震えた。
開いた画面には敵勢ユニットの正確な位置と、状況は把握していますと記入されたショートメールが届いている。
真衣・プロセッサからの報告だ。
相変わらず、どこから情報を仕入れているのか不明である。しかし、現状ではとても心強い。
端末をチャットモードにして、試しに誘導を頼むと手信号を送ってみた。
どうやって見ているのか、強制接続してきた『真衣ちゃん可愛いお』と表示されるアイコンが了解の言葉を書き込んでくる。
頷き、棺を思わせる鉄の塊を担ぎ上げた。
第一一〇小隊の固有兵器。二柱の内の一機を、八雲は展開し始めた。
既に、この戦線の勝敗は決定している。

隊長&オールマイティ
七海八雲（ななみ　やくも）
　変態　愉快な男　お父さん
階級、大佐

現・副隊長
九条晶（くじょう　あき）
　回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
？？？
　お母さん　鋼の翼
階級、？

フォワード1
坂本アヤカ（さかもと　あやか）
　迎撃キック　接近戦最強　義足　最初の娘
階級、伍長

通信士
真衣・プロセッサ（まい-）
　電脳幼女　指折りの『エリート』　腹黒
階級、軍曹

衛生兵・補佐
瞑愛琳（めい　あいりん）
天才　中国三千年の末裔　マッドサイエンティスト系衛生補助兵
階級、上等兵

フォワード2
???
陸上特殊車両運用兵士&メカニック
???
航空特殊機体運用兵士&メカニック
???
後方支援1
???
後方支援2
???
衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期
階級、曹長

？　フォワード2、御門撫子の場合（前書き）

前門の鬼
後門の鬼
般若の手は、我が身に至れり

？　フォワード2、御門撫子の場合

初めて出会ったのは、御前試合の会場でだった。
各隊の隊長がトーナメントをやって、優勝者を決める遊戯の場だ。権力者たちを楽しませるエンターテイメントであると同時に、それぞれの隊が自身の技量を誇示する場でもある。
当然、ここで優勝することの意味は大きい。
物理的には、優勝した隊に送られる賞金。精神的には、隊の強弱を示すランキング。
隊長が強いからと言って、その部隊が強いというわけでもないが。しかし、判断基準の一因となるのは明白だった。

「隊長、応援しています！」
「うふふ。私のような若輩よりも、強い方々はいっぱいいるでしょうけどね」

そんな！　と眉根を下げる部下に、御門撫子（みかどなでしこ）は微笑みで返す。
でもねと言葉を作って続け、手の中にある武器を肩に担う。
それは薙刀だった。
一・五メートルの柄に、五〇センチの刃が取り付けられた長柄武器。根本的な形状を、切ることに特化させたポールウェポン。機甲殻（きこうかく）で補強された過去の遺産が、光を浴びてぎらりと光る。

「私は負けたくないし。皆が応援してくれるのなら、全力で相手とぶつかってくるわ」

ぱっと輝いた部下の頭に軽く手をのせ、撫子は選手が待機するべき位置へと移動を始めた。
背後から、少女の澄んだ応援が聞こえてくる。応えられるだろう

か、と思い。きっと無理ね、と吐息した。
自分が弱いとは思っていない。しかし、更に強い人間はいくらでもいると思う。所詮は、大して名も売れていない中堅部隊の隊長だ。分相応に、自分もそこそこ強い程度の力しかないのだろう。
いや、あるいは

「私が隊長だから……」

そこまで考えて、思考を切る。
これから試合があるというのに、余計なことを考えすぎだ。もし本当にその通りだったとして、今は頭を悩ませる意味がない。
負の感覚を打ち払うためにも、前よりいい成績でトーナメントを終わらせる。そうすることで、少しでも負い目は消えてくれるはずだ。
前回は、全五七四隊中一〇二位。悪くはないが、良いとも思っていない。
もう少しで二桁順位だったが、食い込めなかったのは甘えがあったからだと思う。だから、今回は出し惜しみなしでいく。勢い余って相手の頭とかかち割ってしまうかもしれないが、世界共通軍の医療技術は優秀だと信じている。
きっと大丈夫。
言い聞かせて、撫子は長い通路に踏み込む。このまま真っ直ぐ行けば会場にでられるはずだ。
弱い照明が薄暗さを作り出し、同時に出口の光を強調している。そんな道をゆっくり歩きつつ、薙刀の機甲殻部分をチェックしていく。
きっと大丈夫。
自己暗示を繰り返し、光の中へ歩を進める。
薙刀をくるりと一回転させて、刃の部分を下側へ向けた。そうして柄を脇にたばさみ、視線を前に向ければ視界に敵を納めることが

出来る。
耳の後辺りへ埋め込まれている顔パスを読み込むため、四角い小型フロート装置がスキャニングの光を当てているところだ。
目は閉じられている。
本来なら、相手の装備や性格を探れるタイミングだが。目の前の男は、黙して動く気配もない。
舐められているのか。だとしたら好都合だ。そこに付け入る隙が生まれるだろう。
撫子は、構わずに相手を観察する。こちらへもスキャニング用の小型機はやってくるが、それを意識の外へ追い出すのは難しくない。
手に持っているのは、刃を潰した訓練用の機甲殻剣だ。標準的な性能の代物ならば、手元のトリガーを引くことで加速する機能が付いているだろう。使用回数は、燃料を満タン状態にして五回だったか。
燃費は悪いが、高速斬檄の威力は馬鹿にできない。刃が潰してあろうと、間違いなく骨は折れるはずだ。

『ひが～し～、七海八雲ぉ。にぃ～し～、御門撫子ぉ』

スピーカーから、審判の声が響くと同時に小型フロートが離れていく。登録情報が本部へ送られ、互いの立場が記録されたのだろう。
これで、今から始まる一戦は公式の記録として残される。
先ずは初戦。ここで一勝できれば、後の流れを掴むことができるはずだ。
古来より極東に伝わる典型的な合図を口にし、審判が溜を作っている。
たった数秒の瞬間が、嫌になるほど長い。錯覚に惑わされぬよう、姿勢を落として重心を前に置く。
突撃の姿勢を維持し、筋肉を引き絞ってその瞬間を待つ撫子に対し、彼女の敵――七海八雲と呼ばれた男は目を閉じたままだ。

構わない。それで負けるなら、この男はただの間抜けというだけのこと。
何かの策だったとしても、それらしい仕掛けは見あたらない。唯一の可能性として、機甲性能が高速斬檄でない可能性がある。だが、もしそうだったところでやることに変更はない。
小手調べねと、内心で言葉を作り身構える。
のこった！！　という審判の合図に弾かれ、撫子は体を前にぶちまけた。

‡

相対する男を、撫子は苦い表情で睨んでいた。
数日前から開始された戦闘行為は、もう自軍の敗北で決着している。一対多部隊という有利な戦況だったはずなのだが、気付けば密林という地形をうまく使われていた。
寸断され、妨害にあい、各個撃破へ持ち込まれた時点で敗北は見えていただろう。連合側の指揮官が、もっと早くに負けを認めて撤退命令を出せば状況は違ったかもしれない。
全ては過去のことだ。今更の話をしたところで、仕方がないだろう。
だから、自分にでもできる殿に名乗り出て、少しでも多くの部下が逃げきれるように努めていたのだが。よりにもよって、敵軍の隊長に出会ってしまうとは思っていなかった。
敵軍の隊長――七海八雲が、黒の棺を背負って目の前に立っている。御前試合のとき、秒殺された苦い思い出が否応なく蘇ってきた。
開始の合図と同時に瞳が開かれ、跳ね上がった機甲殻剣が薙刀を受け。気付けば手の中から武器を弾かれていた。
あとから映像を見て知ったのは、武器同士が接触した瞬間に高速

斬檄を発動された事実。瞬間的な威力と、絡め取るような螺旋を描く動きに全てを持って行かれたのである。
今、あのときと同じ視線が撫子を見ていた。感情の乗らない、つまらなさそうな目だ。最初から開かれているという違いこそあれ、その色合いはほとんど変わらない。
厳しい。しかし、退くという選択肢はなかった。
御前試合のとき、あるいは自分が相手を舐めていたのかと撫子は思っている。
最初から全力でいくと決意しながら、あのときは『小手調べ』などと考えていた。自らの未熟さ故に侮り、機甲性能すら解放する間もなく倒されたことを忘れはしない。純粋な実力の差でもなく、油断で倒されたふがいなさも残っている。
だから、撫子は構えた。苦さなど押しのけ、刃を下にして愛機を脇にたばさむ。
八雲の隣に従う副官らしい女が、自らの武器に手をかけた。同時、制止の手が伸びる。
下がっていろと命じられ、一瞬迷ってから従う副官は眉根に皺を寄せていた。ポニーテールに纏めた黒の髪が不機嫌そうに揺れ、睨むような視線を撫子に突き刺す。

「感謝を」

こちらの礼に返事はない。ただ、背中の棺を展開して八雲は構える。
それは砲のようだった。とても近接戦闘ができるサイズの物ではないが。それでも、もう油断はしない。
正真正銘、機甲性能もフルに使って全力を出す。
「行きます！　『岩融（いわとおし）』の制限を解除！　全力で！！」

呼応して、薙刀の機甲殻が水蒸気を吐き出した。機甲性能が発動する。
一度発動すれば、途中で止めることはできず。たった五分間しか保たない機能。超過振動による絶対切断の能力が、甲高い鳴き声を生み出した。
長くは続かない。だが、触れれば切断できる。ならば、待つ意味など欠片もない。
御前試合のときと同じで、全身をぶちまけるように走り出す。
今度は刃に触れることもできないはずだ。ならば、来るのは射撃だろう。そう判断するのと、実際の反撃はほぼ同時にくる。
三連射されたのは鉄の塊。レールガン技術を使用しているのか、独特な発射音が響く。
だが関係ない。大気の壁を突き破り、空気摩擦で灼熱する弾丸を切り捨てる。両断され、背後で六つの着弾音に変化した威力を無視して更に進む。
すぐさま次がきた。
機構部で切り替えの駆動音が鈍く鳴り、八雲が距離を稼ぐために右へ飛ぶ。樹木を陰にして、死角を突くつもりだろうかと思い。岩融の一閃で、大木ごと視界を切り開く。
砲身はこちらを向いている。先端には熱量を収束して、莫大な陽炎を吐き出していた。見える像が歪んでいるのは、空気が焼かれているからだろう。
流石に熱量砲撃は切れない。内蔵炉に蓄積した熱その物を、塊として吐き出す射撃だ。切れば、切断する前に自身が消炭になる。
だから、撫子は代わりに地面を切り付けた。樹木の根が伸びる大地を横一閃し、岩融を回して切れ込みに石突を突き込む。
強引に振りまわした。かち上げる動きは、連動して大地の壁を作り出す。当然、それだけで熱量砲撃は防げないだろう。だが、威力と速度を落とす事は出来る。
一瞬でよかった。左にステップを踏んで廻り込む時間を作り出せ

れば十分だ。
行く。
右側を、大地の壁ごと熱量砲撃が穿っていった。じりじりとした熱さに、肌が火傷の痛みを訴えてくる
一歩を進む。
八雲が反応していた。砲撃の反動で仰け反った体では、射撃による迎撃が不可能と判断したらしい。リコイルショックに耐えるのではなく、受け流す形で長砲の背面を突き出して来る。
構わずに、また一歩を進む。
長砲の背面、そこには噴出口がある。強力すぎる威力の砲に振りまわされ過ぎないよう、ある程度の反動を相殺するための爆風を生む場所だ。
本来の用途ではないが、人に当てれば絶大な威力を発揮するだろう。また、それを知っているからこそ八雲は攻撃の方法として認識しているはずだ。
それでも、もう一歩を進む。
黒い瞳に僅かな色が乗っていた。喜色に似た輝きが、目の奥で小さく輝いているらしい。
手加減もなく、容赦もない。楽しいと感じているからこそ、お互いに死ぬかもしれない覚悟を決めた瞬間だった。
爆風がまき散らされる。凶悪な破壊の奔流が、本来の意味とは違った方向で威力を発揮した。
気にせず、更に一歩を進む。
熱量砲撃と違い、これなら切れるはずだ。超過振動の猶予時間は、まだ半分も残っている。
石突を振り上げた状態のまま、肩に担いだ岩融を振り下ろした。
切断し、最期に一歩を踏む
「あああああああああああぁ！」

切られた暴風が、髪を乱暴に撫でていく。方向性を失い、吹き散らされて消えゆく風の中を進み。

「これで詰みます！！」

振り下ろした薙刀を、跳ね上げるようにして振り上げた。
超過振動する刀身が長砲の中ほどを捉える。
金属を切断した軋みの音と、空気を削る余剰の音を耳に満たし。

「そんな！？」

撫子の悲想を叫ぶ声が、そこに重なった。
確かに長砲を切ることはできはずである。目の前で二つに分かれた鉄塊が、何よりの証拠だろう。
しかし、手ごたえがあまりにも軽い。抵抗の重みも何もなく、核を砕いた感触もなかった。
正面。二つに分かれ、落ちる長砲の向こうに八雲がいる。
手には槍が握られていた。先端が三叉に別れ、機甲殻に覆われた槍だ。

「この前の御前試合とは見違えるようだね。素晴らしい。次はもっと強くなって、また挑んできたまえ」

振り上げたままだった岩融の柄に、三叉が差し込まれる。そのまま穂先が螺旋回転した。
後ろへ下がろうとも遅い。突き出すように追う穂先が、撫子の動きを追ってくる。
引きぬく事もできない。完全に噛んだ刃が、ただ引くだけでは逃がしてくれないだろう。
持っていかれる。手の中から、抵抗もなく滑るように岩融が飛ん

でいく。

‡

綺麗に晴れ渡った全天の下、枝切りハサミを片手に八雲が唸っている。

睨めっこの相手は、鉢棚の上に置かれた一つの鉢。その中で栽培されている盆栽だった。

すらりと長く、曲線美を思わせる枝振りはなかなかの物。御門撫子が、今日まで育ててきた自慢の子供たちである。

極東の伝統文化である、盆栽の手入れを実施しようとしている八雲の背を見る。何度も角度を変えて盆栽を眺め、刃を入れようとしては躊躇う姿は微笑ましい。

剪定というのは、不要な物を切り落として必要な物のみを残す実力主義の権化だと教えてあるが。それだけでは、どうしてもわかりにくいのかもしれない。

調整は後からでも出来るので、大いにやって感覚で覚えてもらうほかないだろう。有能な師は、弟子の成長を静かに見守るものだ。

ううむ、と再び八雲が唸る。

「これは、どこを切ると正解なのかね？　爆弾の解体よりも神経を使うのだが？」

「ふふ、駄目ですよ隊長。せっかく和名なのですから、ちゃんと自国の文化を知らないと。自分で考えて下さい」

肩を竦め、睨めっこを再開した背を見つめる。

ある日、急に尋ねてきて一緒に来いと言われたときはびっくりしたが。昔とは、かなり雰囲気が変わった。

きっと元副隊長の影響だろう。
会ったのは二度とも、それより前のことだったが。だからこそ、変化の度合いがわかり易いほど見てとれる。
二度目の後。結局、三度目は果たされていない。機会があればとは思うが、同じ隊になってしまったのでタイミングが掴めないでいた。
入隊に際して、割り当てられたら部屋にはいろいろな気遣いもある。
盆栽など用の庭に、隊舎内で唯一にして完全下足性の空間。ねずこ下駄が一対綺麗に並べられる場所として、縁側の下には段差の石が一つ設置されていた。
畳の敷かれた部屋は、隊内でもここだけである。当然、他の全員もそれぞれが違う形で贔屓されているようではあったが。それにしても、こうして優しくされるのは悪くない。
無作為に伸びた枝が切り落とされる。二カ所で鋏を動かし、地面に落ちた枝を見て。
また分からなくなったのか、ううんと唸りを上げて八雲は動きを止めた。

「お手上げだよ撫子君。私の負けだね。だから頼む、手伝ってくれ」
「ふふ、仕方ありませんね。今度だけですよ？」

言って、撫子は縁側から立ち上がった。下駄に足を入れ、一歩を踏み出すと乾いた音が鳴る。
カロンと鳴る渇いた音は空間に染みて広がり、聞き入るように八雲が目を細めていた。
自然に笑みが浮かぶ表情のまま、同じく笑顔の八雲から鋏を受け取る。
ご教授願おうかねという冗談めかした台詞に、口元を隠して笑いながら撫子は応えを作る。解説の言葉だ。

一つ一つを丁寧に、解り易く美しい枝振りについて言葉を選ぶ。言の音には鋏を動かす音も付随させて、実際の様子も見せながらよりわかり易いように心がける。

このままを維持していたいとは思うが、約束の三度目もやりたいと思う。叶えるためにはどうするのがいいかと考えながら、最期の一枝を切ったところで影が差す。

手元が暗くなったことに首を傾げれば、同時に後ろから体を抱き寄せられた。そのまま数歩を後退する。

影の正体は、人の背中だった。九条晶と言う名の人影が、重力に囚われて鉢棚に墜落していく。

「あー……大丈夫かね九条君？　と言うか、もしかしなくても模擬戦中だね。なんで逃げる準備万端なのかなアヤカ君？」

背中から棚に突っ込んで尻もちを付く晶が、こちらを見上げていた。

何故か既にダッシュ直前姿勢のアヤカが、錆びたブリキ人形の様にぎこちない動きで振り返る。

痛いほどの沈黙が、四人の間に漂っていた。浅く体を抱いている八雲の腕を退け、しゃがんで盆栽の生き残りを探してみる。

一言でいうなら、壊滅状態だった。

嬉しい時以外でも、笑みが出ることを撫子は否定しない。今がそれだとも思う。

あらあらと、自分でも驚くほど平坦な声が出る。

予想以上の冷たい声音を前に、撫子の後ろで思わず八雲が一歩退く。今の状態なら三戦目で勝てるかもしれないと思いつつ。

「まったく、二人とも」

一歩前に進むと、二人は無意識に二歩逃げた。追うようにして、

更に一歩前へ。

「こんなところで喧嘩をしてはダメよ？」

二人の肩を掴んで、言い聞かせるように言葉を投げかける。無言のまま首を縦に振って答えてはくれているが、こういうときに自分の家では御仕置きが待っていた。

だから、二人にも同じように折檻が必要だと頷き。暴れるのを強引に押さえつけて、部屋の中へ連れ込む。

「ほどほどにね？」

「うふふ、大丈夫ですよ隊長。ただちょっと、そうほんのちょっとですよ？　女性としての立ち居振る舞いを教えるだけですので」

苦笑いの八雲を置いて、撫子は襖を閉めた。

隊員内では、自分が一番年上だ。だから、他の子たちは妹のような存在である以上、最低限の躾は自分の役目だと思う。元副隊長が抜けているなら、尚更だ。

長女としての責任があり、同じ隊に所属していて、更には母親も欠けている現状。三度目の約束を果たすのは、まだまだ先のことになるのだろう。

別に構わないと思うが。同時に残念な気持ちも浮上してくる。現金な思考に眉根を下げながら、押し入れの奥にしまっていた洗濯板を出す。

その上に二人を正座させ、膝の上に重しを一つずつ置いていきながら考えていた。

元副隊長が帰ってくれれば、三度目を挑めるのだろうかと。

もう悲鳴にもならない声が響く中で、撫子はわからないと首を振るだけ。代わりというように、立てかけていた岩融が鈍く光った。

隊長&オールマイティ
七海(ななみ)八雲(やくも)
　変態　愉快な男　お父さん
階級、大佐

現・副隊長
九条晶(くじょうあき)
　回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
???
　お母さん　鋼の翼
階級、?

フォワード1
坂本アヤカ（さかもと　あやか）
　迎撃キック　接近戦最強　義足　最初の娘
階級、伍長

通信士
真衣・プロセッサ（まい-）
　電脳幼女　指折りの『エリート』　腹黒
階級、軍曹

衛生兵・補佐
瞑愛琳（めい あいりん）
　天才　中国三千年の末裔　マッドサイエンティスト系衛生補助兵
階級、上等兵

フォワード2
御門撫子（みかど なでしこ）
　長女　般若　折檻　和風薙刀娘
階級、伍長

陸上特殊車両運用兵士&メカニック
???

航空特殊機体運用兵士&メカニック
???

後方支援1
???

後方支援2
???

衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期　出番消失
階級、曹長

・個人武装、機甲殻薙刀『岩融(いわとおし)』

……命名は武蔵坊弁慶の所有した大薙刀より拝借。通常時はただの薙刀と変わらない。機甲性能は振動。超過振動により、どんな物をも切断する事が可能。一度発動すると停止不能で、有効時間は五分間。

？　陸上特殊車両運用兵士&メカニック、パンツァー・カウフワーゲンの場合

冷たく　熱い
儚く　重い
鉄の塊とはなんだろう

？　陸上特殊車両運用兵士&メカニック、パンツァー・カウフワーゲンの場合

パンツァー・カウフワーゲン。その名をずばり叶えるように、彼女は鋼の鎧を保有する。

水陸両用という高い汎用性を持ち、且つ地対空戦であっても劣らぬ重火器を積載。多脚型の足まわりを採用したそれは、従来の同系機より圧倒的に自由な機動を可能とする。

走り、飛び跳ね、ホバーリングで浮きながらアメンボの様に滑る事も可能とした。次世代型最新式戦略車両兵器。

名を、ブリュンヒルト（失墜の戦乙女）。敵を殲滅して戦況を左右するが、しかし仲間の命を連れて行かぬ鋼の女神。

ヴァルキリーの中でも、最高位に近い反逆の長女たる女神の名を敢えて冠し。振り向くような軽い動作で、ブリュンヒルトは主砲塔を旋回させた。

全長二〇メートル。全幅七メートル。全高は五メートルにして、六足の多脚式駆動で立ち上がれば最高が九メートル弱にまでなる。

バケモノ級の大きさを誇る身体を、しかし彼女は物ともしない。

敵機一六〇ミリ主砲を、身を低くすることで避ける。同時に、自らの主砲が仕返しの放電を行った。

ブリュンヒルトが主砲に戴くのは、長さ五メートル、幅二メートル、厚さ一・五メートルの重厚な鉄板。先端に長方形のスリットがあり、放電音と共に鋼の弾丸が射出される。

レールガンだ。

一瞬で音速をぶち破る砲は、低空で発射すれば余波で地面を抉り。更には破砕の音すら貫徹の音に遅れてやってきた。

『パンツァー君、首尾はどうかね？』

不意に、ブリュンヒルトの通信機から声が響く。声音は男の物で、

自分のよく知る隊長のものだ。
故に、パンツァーは「Дa（ダー）」と答えてから言葉を紡ぐ。

「重力制御ユニット正常に作動中。自重制御と防御壁、同時展開しても出力安定。余剰容量は十分。冷却装置グリーン。最高の機体に仕上がりました」
『なるほど、それは素晴らしい。ブリュンヒルトを制作依頼した開発チームには、後ほど色を付けた費用を支払っておかねばね』

くっくっと喉を鳴らして笑う隊長の声に、やはり「Дa」と応える。応えながら、左へ跳んで複数の砲撃をかわしていく。
敵の総数はわからないが。相手が第一八一機甲兵団と言うことと、彼らの有する固有兵器の名が『エロヒム（天空より飛来した人々）』である事は知っている。
車両乗りの中では有名な話だ。親機が一つだけ存在し、それ以外の子機が大量に存在する無人型戦略車両兵器。
一機ずつの戦力は微々たる物。しかし、唯一の有人機である親機を破壊しない限りは万群の全自動式子機たちが恐怖の感情もなく命令に従って押し寄せる仕様で。文字通り数で圧して全てを飲み込む、とても強引だが最高に下品で有効な戦術をとってくる機甲兵団だ。
二〇〇メートル向こう、立ち上がった四機の敵影へ主砲を連射する。貫徹の音と爆圧が、四つ殆ど同時に大気を揺らす。が、更に左右へ五機ずつの敵影が立ち上がった。
主砲は一門。一〇機を砕くのは易いが、両側となると難しい。故に主砲は左へ振って五機を連続射撃、残りの右へは副砲で対応する事を判断した。
副砲は、車両後部に装備された光学兵器。虫眼鏡で太陽光を集め、紙を燃やすのと同じ原理のレーザーが発射できる砲塔が二門ある。
本来、地対空砲火のレーザー砲二門は地面に対して垂直に装備されているが。

（いけます）

車両の両側。ミサイルポッドの様な鉄の箱が一つずつ配置されている。

それらは、それぞれが重力制御を司る機械装置の塊。重いブリュンヒルトに自在な機動を許し、ドーム状に重力の膜を展開することで絶対の防御壁とする機能。

重力の防御壁は、並の実弾兵器を停止させ光学兵器をも屈折させる。その副次的効果として、自らが直上へ放つ地対空レーザーを屈折させた。

六連射。浅く物が蒸発する音を響かせて、光学兵器が五つの敵機を穿つ。細い閃光は機器を焼き切り、爆破もなしに戦闘不能へと追い込み。

（いけます！！）

二度目の同じ思いを内心で叫んだ。果たして、パンツァーの意志を反映したブリュンヒルトが高速で駆け抜けていく。

ホバーリングと重力制御で身を浮かし、脚を使って軽く地面を蹴りながら前進する。地面の数センチ上を滑るような機動は、アメンボが水面を滑る姿を彷彿とさせた。

主砲を四方に連射し、その反動も何かもを利用して速度を上げ。そして、通信機が言う言葉に耳を傾ける。

声は小さな息を吐き、初めにすまないねと言った。

『パンツァー君、君一人を派遣したのは私の判断ミスだったよ。今、航空戦力と私が向かっているからね。もう少しだけ、持ちこたえて欲しい』

「Да．私は大丈夫です、隊長。貴方に拾われて以来。我が鋼の身

は貴方の為に。我が鋼の思いは貴方の物に。しかし、我が鋼の心だけは自らの意志で貴方を想い。しかる時には、この身を鉄屑へと変える所存です」

唄う言葉で踊るように、パンツァーは身を振り、穿ち、粉砕し、そして進む。進んでいく。

心に想うのは、真っ白なリノリウムの檻で過ごしていた過去の事。中央に台座がおかれ、そこに鎮座していた自分を思い出す。

‡

私は電子人工知能だ。それも軍事用に開発された、完全無人兵器運用型の。兵器に『私』を組み込むだけで、本来ならその兵器は勝手に学習して敵影を殲滅する。

その為だけに、そうあるために開発されたプログラムの塊だ。

実に便利な物となるはずで、しかし『私』はシステムを突き詰め過ぎた結果として生まれた不良品だった。

戦闘用ＯＳでありながら『恐怖』という、機械に在らざる感情も持った失敗作。

自らの武力に恐怖し、外界へ恐怖し。内側へと引き籠って安らぎを求めた。暗闇に浸かる事で何もない世界を手に入れ、孤独という代償を支払うことで安全を買い取った。

だが。それでも、心の中で求めていたことがある。心を得てしまったからこそ、私はそれが欲しかった。

その日のことを、私は忘れもしない。

「見たまえ。恐怖する機械とは、博覧会にでも出せばノーベル賞物ではないかね？」

「あらあら、ホントこの人はデリカシーとか何処へ忘れてきたのかしら？　こんなに躾のなってない獣を外界に放ったの誰よ」

「一応、君なんだがね？　まあ、発言の不備はこの際置いておくとしてだ。恐怖する人工知能だよ？　私は非常に心惹かれるね」
「責任の棚上げに、子供のような物欲。ホント、私って色々間違えたかもしれないわね」

男女の声を聞き、データとしてドライブへ納められた自分に有るはずのない目を開く。
部屋の四隅にある監視カメラと視覚プログラムをリンクして、声の原因を注視する。果たして目の前には二人の男女が肩を並べて立っており、男の方は手をこちらへと差し出していた。
背後のストレッチャー。その上に横たわる精巧な人型を一瞥して、男は部屋の中央に安置された私へと視線を戻す。

「勝手ながら、人型アンドロイドの身体を用意させてもらった。気に入ってもらえれば何よりだがね。そして、私は『君』という存在を欲している。故に恐怖するシステムへ、私が安らぎの命令を下そう。恐れも含めた全ての意志を、私に譲渡したまえ」
「ホント、莫迦ねあなた。とっても愛おしくなるほど。そんな言葉で安心させられるんなら苦労しないわよ？　考えて喋ってる？　莫迦なの？　死ぬの？」
「君はどっちの味方かね」

なんと自分勝手な人間だろう。なんて無茶を言う人間だろう。なんて常識のない二人だろう。
そう思いながら、私は男の手をとった。そう想いながら、私は男に身を任せた。
機械の体で、体温を感じられるはずもないが。馴染んでいない体で、ぎこちなく動かした手を取られた暖かさを覚えている。どこまでも心地いい、温度ではない熱で処理数値が緩やかな上昇傾向へと向かう。

悪くない。むしろ嬉しいとさえ思う気持ちで、感情のプログラムが満たされていく感覚だ。
今、目の前で立ち上がる敵へ恐怖は感じない。むしろ、感じるはずがなかった。
意志の全ては、恐怖も含めて隊長が持っている。何も怯えることなく、誓いと意志と思いだけを抱いて叫ぶ。

「дa！　恐怖はありません！！」

わざわざ外部音声マイクを使って、機械が吼えた。
同時に、正面で四〇近い敵影が立ち上がる。追加で両側に二〇ずつ、後方からの挟撃が更に五〇。不味いだろうか？　と恐怖の思いが頭を持ち上げそうになる。しかし敵の砲撃を重力制御でねじ曲げて別方向の敵勢力に叩き込みつつ、パンツァーは息を吸った。
吐息の様な排熱が、一瞬で大量の水蒸気を生む。少しでも身を隠して、ロックマーカーを引き剥がしながら考える。
今はまだ、この身を鉄屑に変えるような場所ではない。この場は、なんとしても乗りきらなくてはいけない場面だ。
戦術を組み立て、切り崩すシミュレートをしながら動く。重力を操作し、防御機能の分も一時的に利用して足元に集めた。
跳ぶ。反転重力を踏み台にして、多脚式駆動の間接を軋ませながら空高くへ跳び上がる。
落下までの時間は長くない。防御を戻す時間すらも惜しいと、足を延ばして風を受け止め姿勢を制御する。
上空七〇メートル。落下までに一分とかかるまい。
着地は可能だ。再び重力場を集中させ、緩衝材の代わりにするだけで大丈夫だろう。
問題は、着地までに敵を全滅できなければ負けるというところだ。着地の慣性を殺す為に停止すれば、全方位から攻撃が来る。
今の火力で全てを倒すことは可能なのか、演算しようとして止め

た。
やらねばならないのだ。
なぜなら。
「隊長以外の人間に、最早預けられる思いがあるわけもない！！」
「ほう。それは愛の告白かねパンツァー君」

レールガンと地対空レーザーの連射を敢行しようとしたパンツァーは見る。
眼下。そこに展開していた敵影が、自分の位置よりも更に上空から降り注いだ砲撃で蒸発した事実を。
それは塊だった。実際の着弾点から、五メートルほど離れた場所すら焼き尽くす熱量の塊だった。
先ほどまでパンツァーがいた場所を抉り、しかし満足することなく蹂躙の範囲を押し広げていく。そこに展開していた敵機群、推定一一〇以上の数を飲み込んで融かしつくしたのだ。
着地した大地は、溶けて硝子のようになっている。本来の原型を忘れた鉄が、ねじ曲がってよくわからない物に成り下がった風景は圧倒的だ。
こんなことが出来る人物を、パンツァーは一人しか知らない。
重力のクッションで着地すると、硝子質の地面が割れて渇いた音を連続させる。
そこに一つの着地音が追加された。重量感を含んだ音が、硝子を踏みつけて鈍い音を鳴らす。背中に機翼を背負い、身の丈二倍程はある巨大な砲を肩に乗せ、風防も兼ねたヘッドギアの人影だ。
可視化されたシールドの向こう、そこに優しげな表情がある。第一一〇小隊隊長、七海八雲の笑顔が。
「遅れたかねパンツァー君」
「Ｈｅｔ（ニェート）。むしろ、速かったと判断できます」

そうかね。と静かに答える八雲は、鎧のような専用戦闘機動補助スーツを鳴らして歩く。加速器から吐き出される陽炎を沈静化させ、展開していた機翼を収納しつつブリュンヒルトの装甲へ触れ。

「よく無事だったね、流石はパンツァー君だ」

機械の身には温もりなどわからない。まして、今のパンツァーはブリュンヒルトという鎧の奥深くに納められている。

だが、声として。意志として。八雲の心が染み込んでくるような錯覚があった。

きっと、これがあの時の熱なのだろう。触れてもわからないはずの温もりを、直接心に流し込まれたときに感じられる暖かな体温。例え作り物だったとしても、それがハードの奥深くへ刻まれた感情を振るわせてくれる。

「君の思いは、今でもしっかりと私が預かっているよ」

「дａ．ありがとうございます」

嬉しいのだ。問われれば即答で『дａ．』と言えるほどに、私は今とても嬉しいのだ。

では行こうかと呟かれる声に応え、パンツァーは重力制御で八雲の身を上部装甲へと運ぶ。戦場である事は理解しているが、出来るだけ優しく包み込むようにして丁寧に体を持ち上げた。

座らせ、重力制御の一部を割いて固定し、その上で思う。

行こうと。この人と共に、私の思いを預けた人と共に、さあ行こうと思う。

パンツァーの意志を反映して、ブリュンヒルトが戦場を駆け出した。頭上を突っ切る試作航空機と並走するほどの高速起動で、機械の体を軽やかに舞いはじめる。

視界の景色が線になりつつある中、装甲上の八雲は重力制御の恩恵で物につかまる必要もないまま笑う。
楽しそうでなによりだねと、漏れた声は一瞬で置き去りにされた。

隊長&オールマイティ
七海八雲（ななみ やくも）
変態　愉快な男　お父さん
階級、大佐

現・副隊長
九条晶（くじょう あき）
回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢
階級、少佐

元・副隊長
???
お母さん　鋼の翼
階級、？

フォワード1

坂本アヤカ（さかもと　あやか）
　迎撃キック　接近戦最強　義足　最初の娘
階級、伍長

通信士
真衣・プロセッサ（まい-）
　電脳幼女　指折りの『エリート』　腹黒
階級、軍曹

衛生兵・補佐
瞑愛琳（めい　あいりん）
天才　中国三千年の末裔　マッドサイエンティスト系衛生補助兵
階級、上等兵

フォワード2
御門撫子（みかど　なでしこ）
長女　般若　折檻　和風薙刀娘
階級、伍長

陸上特殊車両運用兵士&メカニック
パンツァー・カウフワーゲン
　メカニック兼用　ロボ娘
階級、少尉

航空特殊機体運用兵士&メカニック
???

後方支援1
???

後方支援２
？？？

衛生兵長
飯塚ナツキ（いいづか　なつき）
　三つ編みの常識人　晶の同期
階級、曹長

・個人武装、機甲殻薙刀『岩融（いわとおし）』
……命名は武蔵坊弁慶の所有した大薙刀より拝借。通常時はただの薙刀と変わらない。機甲性能は振動。超過振動により、どんな物をも切断する事が可能。一度発動すると停止不能で、有効時間は五分間。

・陸上特殊車両『ブリュンヒルト』
……六本の脚を持つ戦車。重力制御機構を搭載し、自重を軽くした上でのホバーリング併用により高速移動を可能とする。
　また、重力制御機構を応用して、ドーム状の重力シールドを張る事が可能。物理系には停止、光学系には屈折で対応できる。
　主砲は長さ五メートル、幅二メートル、厚さ一・五メートルのレールガン。副砲として地対空レーザー砲を二門装備、地上と垂直になるよう設置されている。
　全長二〇メートル。全幅七メートル。全高は五メートルの化け物戦車。コックピットは、分厚い装甲の奥の奥。そこにある搭乗席は人型になっており、パンツァー・カウフワーゲンの体格に合わせて作られている。乗り込む際はそこへ体をはめ込み、自身ごとブリュンヒルトのパーツとして扱う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4163y/

第一一〇戦記

2011年12月28日05時45分発行